



目次

まえがき	5
① 「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」	7
② 現代語訳と和歌	15
③ 源氏物語に見る歌の善し悪し	23
④ 歌の名手・明石御方	31
⑤ 凄絶な歌・六条御息所	39
⑥ 源氏物語千年紀	47





詠者別作中和歌一覽……………	189
あとがき……………	185
20 本心の読めない歌・大君の和歌……………	177
19 物語を「予告」する歌・中の君の和歌……………	169
18 「花」のある歌・匂宮の和歌……………	161
17 「迷いの歌」・薫の和歌……………	153
16 物語の節目を示す歌・光源氏の和歌……………	143
15 中国語訳源氏物語における和歌……………	135
14 英訳源氏物語における和歌……………	127
〔番外編〕その2 「古典文法の話」……………	119
〔番外編〕その1 「古典仮名遣いの話」……………	111
13 幼い歌・女三の宮……………	103
12 己の本心を教えられる歌・紫上……………	95
11 公と私を揺れる歌・藤壺中宮……………	87
10 紫式部自身の歌(2)……………	79
9 紫式部自身の歌(1)……………	71
8 紫式部の好きな歌……………	63
7 手習の君・浮舟……………	55

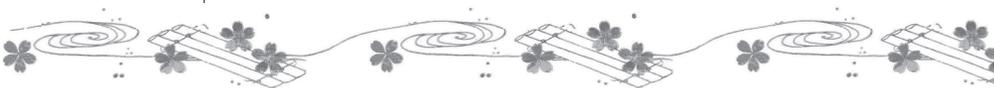


まえがき

皆さんはなぜ源氏物語がこれほど有名なのだと思われませんか。もちろんその理由は色々ありますが、そのうちの一つが、和歌を作る時の参考書として使えることです。と言うのは、源氏物語には全部で七百九十五首という、第一勅撰集である古今集の千百首と比較しても、それほど見劣りしない数の和歌があり、しかも歌集よりも詳しい、その歌が詠まれた時の状況説明が付いているからなのです。

最初にそれを言ったのは、新古今和歌集の撰者で、歌の名人として有名な藤原定家の父にして、自身も第七勅撰集の撰者であった藤原俊成ですが、詳しいエピソードは本書の第一話をお読み頂くとして、それ以来歌人にとっては、源氏物語は必読書と言われています。けれど現在では、源氏物語をちゃんと読んでいる歌詠みは非常に少ない。そこで読んでいない者にも分かる、源氏物語の歌の解説のようなものをお願いできないかという依頼が、同じ宮崎に住むよしみで、日本を代表する歌人の一人である伊藤一彦先生から、源氏物語を専門とする私のところに舞い込みました。それで始まったのが、伊藤先生主催の短歌雑誌『梁』に、現在も連載している「源氏物語と和歌」で、本書はその二十回目までを収めたものです。

本書の書名に「和歌る」という造語を用いたのもそのために、「和歌で（源氏物語を）分か



る」と、「和歌を作る」を掛けてあります。本書が「和歌作り」に少しでもお役に立てば、それに優る喜びはありません。

しかし、伊藤先生には初めから申し上げていますが、私には古典の歌の善し悪しは分かって、現代短歌の善し悪しは分かりません。ですから、時々ずれている話もあるかも知れませんが、それでも皆さんが和歌を作られる時に、多分これはお役に立つだろうと、無い知恵を絞って書いたのが本書で、それが番外編として古典仮名遣いと文法の話もある理由です。現代短歌は現代仮名遣いで書かれたものもありますが、基本は古典仮名遣いで書くものだからです。

それと、一つのエピソードは大体八頁くらいにまとめました。エピソード間は連想形式を取ってはおりますけれども、それ以外の直接的な繋がりはありません。ですから皆さんは、既に御存知のところは跳ばして、必要な箇所だけ読んで頂いても結構です。とにかく肩肘張らずに、源氏物語の和歌の世界におつきあい頂ければ、有難く存じます。

なお、源氏物語の本文引用と現代語訳は、原則として小学館の新編日本古典文学全集によりましたが、若干私に直した部分もあります。また巻末に、本書で取り上げた源氏物語作中人物の全歌を掲げることにしました。何しろ光源氏、薫と言った主人公級の人物は、本書で取り上げた歌の数よりも、取り上げなかった方が多いので、それを参考に、その人物の全体的作歌傾向を読み取って頂ければ幸いです。

① 「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」

宮崎大学で源氏物語を講じている山田と言います。この度、宮崎のご出身で、全国的にも有名な歌人・伊藤一彦先生の御依頼で、作歌をなさる方のお役に立てるようにと、「源氏物語と和歌」をテーマとして一書をもつことになりました。今回の最初の部分は一度、伊藤先生の歌会でお話したことと重なるのですが、お聞きになれなかった方も当然いらっしゃるので、繰り返してお話することにします。

今回のタイトルは、藤原定家の父で、第七勅撰集・千載集の撰者としても有名な藤原俊成の科白から引用してみたのですが、彼はなぜ、「源氏を知らないような歌人はダメだ」と言ったのでしょうか。源氏物語には七百九十五首という、古今集（千百首）並の和歌が含まれており、しかもその全てが名歌ということも理由の一つとしてありましようが（但しそれは、いずれお話ししますが、歌が下手と設定されている人物の歌はちゃんと下手に作ってあるという意味も含めての話です。ちなみに紫式部は歌集も残していますが、後で引用する俊成の言葉にもあるように、そこにある歌よりも源氏物語中の歌の方が上手い——つまり、自分の立場で詠むよりも作中人物に成り代